

## ■ 平成30年8月27日（月）観光振興対策特別委員会県内調査

### 1 興福寺

#### ア 調査目的 中金堂の再建について

#### イ 施設概要



【歴史】669年 藤原鎌足の妻が夫の造った釈迦三尊像を安置するため、京都山科に山階寺を建立

672年 飛鳥の地に寺を移し厩坂寺を建立

710年 平城京に遷都され、藤原不比等が寺を平城京左京三条七坊の地に移し、興福寺と名付けた。

【伽藍】国宝館、東金堂、中金堂、五重塔、北円堂、南円堂、三重塔他

#### ウ 調査概要

- ・中金堂は7回火災にあったが火災のたびに再建された。66個の礎石の内、64個が奈良時代のものであり、柱の位置が動いておらず平面的な復元ができる。
- ・中金堂の大きさは平城京大極殿とほぼ同じ、いかに藤原不比等に力があつたかが分かる。中金堂は平屋建て、大極殿は二階建てで、それが大きな違い。
- ・1尺29.54cmの天平尺でつくられ、奈良時代の初期に建立されたことがほぼ証明できる。
- ・国の補助事業で境内整備が進んでおり、境内の元の姿がおぼろげながら見えてきたところ。補助事業は平成36年までだが、2、3年延びる可能性がある。
- ・忠実に復元すると構造計算上、地震に耐えられないため、天井を1m低くし、四隅に壁をつくったが外観上は当初の復元案どおり再建できた。
- ・工事に使う大きな木材が日本では確保できないためアフリカケヤキ等を使用した。香港の寺などで使用実績があるので実際に香港に行って確認した。
- ・図面、古文書、絵などがあり、平城京大極殿に比べて安心して復元することができた。平城京朱雀門、大極殿の工事のとき大工をやっていた若い人が、今回の中金堂再建では棟梁を務めているなど、業者はほとんどが平城京の工事に関わった者。
- ・維持管理をしっかりすれば今回再建した中金堂は1000年はもつ。
- ・国も知事も歴史文化資源の活用を前面に出しているが、保存がおろそかになる懸念がある。両方をバランス良くしてもらいたい。

### 2 天理駅前広場コフフン

#### ア 調査目的 天理市の観光振興等の取り組みについて

#### イ 調査概要



#### ＜観光振興の取り組み（総論）について＞

- ・コフフンという名前は、天理市には1600以上の古墳があり、それがモチーフで、一緒に楽しんだり遊んだりする意味合いを込めている。【Co（共に） fun（楽・遊）】
- ・昨年4月にオープンし、年間260件以上のイベントを開催。
- ・視察は国以外にも相当多くの自治体、JR西日本・東日本、渋谷駅の開発チーム、海外関係についても受け入れ。また多くの雑誌にも取り上げられた。
- ・最初は著名な若手デザイナー佐藤オオキ氏のデザインということで注目されたが、まちの中でどういう機能を果たしているのかと雑誌の取り上げ方も変わってきた。
- ・天理駅は京都駅と同じ幅があるが、バスへの乗り換えやすさが重視されていたため、駅の広場は広いだけのスペースであった。今は子どもたちの笑顔があふれる場所になった。
- ・コフフンのプロジェクトは4年半ぐらい前に始まった。天理市、県、商工関係等の駅周辺の事業者、市内で音楽・スポーツ活動をされている方々が協議会のメンバー。
- ・プロジェクトで大事にしたのは、1から全部つくるのではなく、元々このまちには色々なコンテンツがあり、それを生かせるような仕掛けをしていこうということ。
- ・オープンして間もない頃、天理市オーケストラが来られて、音楽が聞こえた人々やトランポリンで遊んでいた子どもが集まってきた。そのような形で一つの空間の中でお互いつながりあっているような仕掛けをしてきた。
- ・ラグビーについては、親里ラグビー場があって天理は聖地であるが、高関心層と無関心層の両極。ワールドカップ前にキリンチャレンジカップがありパブリックビューイングをこの場所でやったが、仕事帰りの人に立ち止まっていただいた。
- ・子育てサークルの横の連携、行政とのつながりをもっと模索していくために、この方々の活動の裾野を広げていくための場所として使っている。
- ・天理大学との連携では毎週、子ども向け、大人向けで英語だけを使うイングリッシュビレッジを開催。
- ・天理のまちをこれからどうしていこうかということをも市民の皆さんが自由にブレインストーミングする、てんり未来ミーティングを開催。
- ・子ども食堂のこれからについて、未来ミーティングとのコラボで、課題等を議論した。
- ・柳本町の柳灯祭のプレイベントとしてコフフン柳灯祭を行っており、祭を知らない人に対しても実は今

- ・度本物の古墳のところで開催することを紹介するなど、市の中でも知られていない地域の取り組みを共有する活動を行っている。
- ・福祉、健康関係などのシンポジウムや相談会を開催したときに、関心のある人は来るが、本当に情報を知ってもらいたい人は、様々な取り組みをやっていることを知らない。このギャップの部分をどうするか。この場所は、特に目的意識無く人々が集まる場所なので、行政の施策をPRしたり、大学の取り組みを市民に発信する場となっている。
- ・オープン当初は、行政主導のイベントが主であったが、今年に入ると7対3で7の方が市民主導のイベントに変わってきている。
- ・使用料は、施設内の民間の利用は無料。屋外では丸一日使用してチケット代を取るようなものでマックス4万円弱ぐらい。子育て、健康づくり関係など、本来は行政がやるべきことを市民の皆さんがやっていただく分は全部減免。
- ・完全に独立採算でやるのは難しい。それよりも市民にどんどん使っていて、市にプラスの潤いを与えてくれるのであればそれでよいという考え方。ここに生まれた賑わいを天理全体を発信するブランディング事業として市全体につないでいきたい。
- ・物づくりについて、これまでの発想では大事なものは中身だと。確かに中身が無かったら話にならないが、残念なのは使ったり、食べていただかないとその中身が分からない。大きな商圏で販路を拡大するには、それが伝わらないといけない。天理のものだと全く分からないものも多かったので、土地が見える商品づくりに取り組んでいる。
- ・周辺に飲食店舗が増えた。T S U T A Y Aのカフェ付きの新しい店舗や、パチンコ店を閉めてゲストハウスにしたり、200室規模のホテルも来ていただいた。固定資産税のバックという誘致の促進はやっているが、本当に民間主導で動いていただいている。
- ・カフェレストランで雅楽をやっているが、近畿圏で雅楽をしっかり見られる場所はそんなに無い。インバウンドをターゲットとして週1回雅楽の演奏と体験会を実施している。
- ・国際芸術家村については、施設の中だけが賑わっているというよりも、山の辺の道、天理駅一帯から芸術文化で地域を底上げしていきたい。
- ・天理市は本当にスポーツのまち。先週、柔道のエジプトナショナルチームが天理に来て合宿をされ、市内の皆さんと一緒にレセプションを行ったり、天理大学では、ロスオリンピックの金メダリストの細川先生などが指導され、非常に充実した取組になっている。
- ・先月にパチンコ店が滞在型のゲストハウスに変わり、こちらに長期滞在をしながら、天理で芸術作品を創作される動きもある。本通り商店街の中に空き店舗があり、展示会、ワークショップをやれるホワイトキューブという場所を市がつくり、ゲストハウスに滞在しながら創作された方が、本通り商店街で市民と一緒に芸術を楽しむという取り組み。今年は韓国のアーティストと日本の若年の写真家が滞在されている。

- ・山の辺の道の天理市トレイルセンターは、かつては無人の休憩所でトイレがきれいで、建物も整っているが、お茶の一つも売っておらず、自分で持ってきたお弁当を食べるだけの場所だった。現在は指定管理で運営し、市が直営でやっていたときの2倍以上の方に来ていただいている。インバウンドで登大路ホテルなど一人100万円以上で泊まれる方々が、山の辺の道に来たときにお昼ごはんを食べる場所として使われている。

#### <フィルムコミッション事業について>

- ・奈良を映画で盛り上げるため、なら国際映画祭が開催されており、オープニング作品は、前回の最優秀賞者が次の映画を撮る権利を得て制作するというので、地元の市町村や県も一緒になってサポートしており、今までの映画祭への天理市民の協力などの積み重ねがあり、今回は天理市でということになった。
- ・前回の最優秀賞者はイラン人の女性監督アイダ・パナハンデ氏で、シナリオハンティングで天理の民家を訪問されるなど、地元との交流をすごく大事にいただいた。イランで元ネタを書いて持って来られたが、実際に天理で地元の皆さんとふれあっているうちに、ほとんど跡形もないぐらい、ほぼ全て書きかえられた。
- ・炊き出しのサポートやエキストラなど、参加していくことを通じて一緒に作っていく感が出てきて、おらがまちの映画だという意識も醸成されてくる。
- ・作品は来月のなら国際映画祭で上映、来年1月からは全国的に公開される。市はロケ地のマップなどを作って、観光にもつなげていく取り組みもしたい。
- ・フランスのモード誌に河瀬監督が連載を持っておられて、奈良とパリの風景を組み合わせる取り組みをされており石上神宮で撮影された。奈良の素晴らしい場所は世界のモード誌でも通用するものが撮れる、元々あるものと新しい感覚を組み合わせるといのが芸術文化と観光を結びつけていく中では重要ではないか。

#### <Facebook「e～やん天理」の取り組み状況について>

- ・この取り組みは、市長は何も文句は言わないので、職員が天理のいいところを自分の視点から発信する。普段やっていること、好きな店でも、これはいいと思うものを毎日必ず継続しようということで、開始から4年程度になる。
- ・記事の閲覧は多いときで1万人以上、少ないときは2千人から4千人。
- ・採用募集を若手の職員が企画を考えて載せたり、乳がんなどの啓発に使うこともあれば、上下水道局では、なかなか普段、仕事の中身が市民から見えづらいが、水道事業がどんな感じなのか自分の言葉で書いている。
- ・福住氷まつりなど、地元でもあまり知られていないことを発信したり、市民が有志でされていることを

発信することもある。

- ・ ケーキが美味しかったという投稿があるが、市長が就任して情報発信の話をしたときに職員の間で戸惑いがあった。個別の店を取り上げることについて、公平性の観点から行政がそれをやっていいのかということで、皆プレッシャーを感じていたが、今までの公はここまでという発想をもう少し柔らかく考えるということで始めてみた。今ではこのような、ゆるーい感じの発信が当たり前になって、取り上げたお店にも喜んでいただいている状況になっている。

### 3 奈良県立橿原考古学研究所



#### ア 調査目的 知事部局移管後の取り組み等について

#### イ 施設概要

【沿革】1938年 「皇紀2600年記念事業」の橿原神宮外苑整備事業に

伴い、奈良県史蹟名勝天然記念物調査会委員の故末永雅雄博士が橿原遺跡の調査を担当。奈良県工事事務所の一画に調査事務所を設け、9月13日より末永博士が現地で調査指揮にあたったことから、この日をもって橿原考古学研究所の創立記念日とする。

1951年 5月、橿原考古学研究所設置規則により、埋蔵文化財調査研究機関として設置。末永所長以下、研究員は非常勤職員で構成。

2015年 教育委員会から知事部局へ移管

2018年 創立80周年

#### ウ 調査概要

- ・ 奈良県にとって文化・歴史に関する観光は大きな柱であり、橿原考古学研究所はその中核を担っている。
- ・ 従前からの学問第一主義は時代おくれであり、文化財と発掘調査の成果など、観光・文化資源活用に努めるとのこと。
- ・ 80周年を迎えるに当たり、「歴史をつむぎ、人をつなぐ」という研究所のスローガンをつくった。奈良の歴史を多くの人に楽しんでもらえるよう職員の意識を改革して、埋蔵文化財の調査研究成果を積極的に活用していこうという意味。
- ・ 知事部局へ移管前からの基幹業務があり、講演会の事業は1940年以来続いている。
- ・ 調査研究部門では、県内の埋蔵文化財発掘調査事務を行っている。知事部局に移管後は、県教育委員会からの委任事務として実施。出土した物の保管と公開を部門の重要な業務の一つとしてきた。
- ・ 国史館、大和歴史館、そして今の博物館につながる流れの中で、文化財の公開を行っている。特別展並

びに特別陳列、それから1981年からは、日本の各地域で行われている速報展の元になった「速報展 大和を掘る」を行っている。

- ・ 60年以上の歴史と約1300名の会員がおられる友の会があり、遺跡現地で歴史を体感する機会の提供や、東京・名古屋といった大都市圏で奈良の歴史の魅力発信を実施。
- ・ 日本書紀成立1300年特別展「出雲と大和」は、オリンピックイヤーの2020年、東京国立博物館で開催。研究所としては考古学及び古代史の展示計画作成及び展示の協力を実施。・調査部で実施している「市民発掘隊」事業は、平成28年度から実施。遺跡でのマナーを5日間の養成講座で勉強していただき、研究所の発掘調査・現地説明会に参加。中には関東の方もおられ情報の広がりにもつながっている。
- ・ 「室生埋蔵文化財整理収蔵センター」活用事業は、考古・美術工芸・建築・民俗学・自然科学のコラボによる講演会を開催するもので、センター開所の平成25年度から実施。講師と参加者の距離が近く、フリートークもあり、膝をつき合わせた講演会。
- ・ 「橿研通信」刊行事業は、平成28年から実施。フリーペーパーで1万冊を年2回刊行。配布先は文化財施設、観光協会、県立病院、奈良まほろば館などで、PDFでも公開。最新の考古学情報のほか、なかなか歩けない世界遺産の大峯奥駈道の全行程など、学問ではなく違う方面から入っていく楽しみ方も発信。
- ・ 古代歴史文化（14県）共同調査研究事業「古墳時代の玉類」は、3年間古墳時代の玉について研究、まもなく本としてまとまる。本年10月から東京で企画展を開催。
- ・ 附属博物館では近年、「だれもが楽しめるユニバーサルミュージアム」の拡充に取り組んでいる。ユニバーサルミュージアムは、「開かれた展示」、「奈良の歴史情報を発信」、「県東・南部地域とともに」、「文化財を身近なものに」の4つの要素からなる。
- ・ 博物館利用者は、小学生が年間3万5000名から2000名弱に激減している。ゆとり教育の時期から減少しており、新しい学習指導要領になっても学校から離れられない状況。一般の方は右肩上がりに伸びている。65歳以上の方は無料入館なので、退職後に自分の趣味として、またアイデンティティーの確認として歴史を勉強されていると考えられる。
- ・ 研究所のこれからの任務は、次のようにまとめられる。
  1. 文化財の発掘調査を行い、展示・公開していくこと。
  2. 歴史に興味を持っている方々に文化資源の情報を提供していく拠点として発展・拡充していくこと。
  3. 小学生に文化資源の魅力を伝えていくこと。